

令和5年度(2023年度) 学校評価総括表

【伊丹市立 荻野小 学校】

教育目標		笑顔あふれ 明日も行きたい学校 ～かしこく あたたかく たくましく 自立して生きぬく児童の育成 ～							
重点目標		①学ぶ意欲にあふれ、自ら課題を見つけ、挑戦し、考え、解決する子ども ②相手の気持ちを考え、つながり、認め合い、温かい心で生活する子ども ③基本的生活習慣を身につけ、いのちを守る行動ができ、粘り強く取り組む子ども							
主要 施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価	
知・徳・		「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	○既習事項を活用する 課題解決の見通しをもつ 課題を見つけ挑戦する ①個人の興味や関心、役割に応じて、学習の個性化を図るとともに、多様な集団で協働的に問題解決に取り組む授業作りをすすめる。 ②基礎・基本の確実な定着を図る。 ③保護者や地域との連携をすすめる。	・学ぶ必然性のある授業や教科横断的な単元学習の実施。 ・子どもの実態に応じた経験的カリキュラムの実施。 ・1人1回の校内公開授業の実施。 ・朝学習や補充学習、家庭学習における、基礎基本の定着と学力の向上の推進。 ・学年懇談会の実施や「家庭学習の手引き」の配布をととした家庭学習の進め方の共有。 ・学校行事や各学年の学習に、地域の方が参画する機会を設ける。	・学期に1回、カリキュラムチェックを実施する。 ・各教員が授業公開を実施する。 ・児童アンケート、「授業がわかりやすい。」において、わかりやすいと回答した割合が90%以上になる。 ・児童アンケート「家での勉強はできましたか。」において、できた(宿題・自主学習・読書など)と回答した割合が90%以上になる。 ・地域の方と連携して、学校行事や各学年の学習を進められている。	A	・学期に1回のカリキュラムチェックを実施できた上に、各学年の実績が蓄積されてきている。 ・校内における授業公開は、概ね各教員1回程度実施できた。 ・児童及び保護者アンケートにおいて、「授業が分かりやすい」との回答が90%を超えていることから、本校教員は児童にとって分かりやすくなるような工夫を凝らしながら授業実践をしているといえる。 ・児童アンケートにおいて、毎日の宿題を中心に家庭学習の取り組みが習慣化している一方で、実態を見ると、その取り組みにおける個人差が大きい。 ・地域と連携した行事や授業の実践については、積極的にすすめられた一方で、今後も持続可能な形で取り組んでいけるよう、検討が必要である。	・授業公開の予定を早めに立てるなど、見通しをもった計画を立てながら、引き続き授業を公開し合い、授業改善における研修の場を確保していく。 ・家庭学習の在り方については、懇談会などを活用し、引き続き、家庭学習の重要性や取り組みせ方について広く啓発していく。 ・地域が参画した行事や授業の実践については、HP等を活用しながら、本校の特色ある実践事例として紹介していく。 ・今後も地域とともにある学校の実現に向けた実践を積み上げるために、学校支援にかかる人材バンクを設けるなど、持続可能な取り組みにつなげられるよう働きかける。	・学校独自のカリキュラムが作られ、見直しもされている。今後も、地域との連携、保幼小中の連携を進め、子どもたちが主体的に取り組む授業づくりに取り組んでいただきたい。 ・学校独自のカリキュラムや地域連携の単元の工夫は大変よいが、教員の負担が大きくならないようにしていただきたい。 ・家庭学習については、保護者へのさらなる啓発と個に応じた課題の工夫が必要である。
		新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	○課題解決の見通しをもつ 課題を見つけ挑戦する 多様な視点から考える ①情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度の育成。 ②英語学習に対する興味関心や意欲の向上を図る。 ③授業や学校の運営に関して、ICT活用の推進を図る。	・タブレットの操作などにおいて、情報活用能力を高める。 ・授業において、情報モラルや適切な活用を意識させる。 ・専科教員・ALT・JTEを活用し、コミュニケーションを取り入れた内容を行う。また、書く内容も取り入れ、英語力の向上をめざす。 ・ICT機器の活用を取り入れた、わかる授業の創造やタブレット端末を利用した学習支援の充実を図る。	・児童アンケート「授業の中でタブレット、スクールタクトを使うことができる。」において、肯定的に回答した割合が 80%以上になる。 ・会話を取り入れた活動やデジタル教材、ICTを活用することで、楽しんで、意欲的に取り組むことができる。 ・教職員アンケート「授業、校務において、ICT機器の活用を意識している。」において、行っていると回答した割合が80%以上になる。	A	・児童、教員ともに、タブレットやスクールタクト等のICTの活用に、利便性や学習効果を感じていることがアンケート結果からうかがうことができた。 ・ALTの追加派遣を行い、様々な国の文化などに触れる機会となった。 ・高学年にはデジタル教科書を導入できた。 ・児童アンケート「授業の中でタブレット、スクールタクトを使うことができる。」において、肯定的に回答した割合が低学年89%、高学年84%と達成目標を超える結果となった。 ・来年度、教科書が変わるため、授業で使うカードなど教材作りが必要となる。 ・一部のマナーのなっていない児童のために、活動を制限することになった。	・今後、さらにICTを上手く活用していく力が児童・教員それぞれに求められる。そのためにも、達成目標の80%という数値の維持もしくは、より高い数値の設定をしてもよい。今年度の結果をふまえて検討していく。 ・専科教員、ALT、JTEを活用し、会話を取り入れた活動、発表の場の設定をする。	・タブレットを日常的に使用する学習を取り入れられているため、発表の場や学習の場で児童がタブレットを使いこなせているようである。しかし、タブレットばかりに頼らない学習活動や、効果的な使用について、今後も検討、研修していく必要があると言える。 ・今後も低学年からALTと関わる時間を設定していただきたい。

学校教育	体の調和のとれた児童・生徒の育成	「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	○他者に共感し寄り添う 挨拶・姿勢等の習慣をもつ 命を守る判断・行動を取る ①思いやりの心や規範意識等、道徳実践力の育成を図る。 自尊心を醸成し、人を大切に思う態度の育成を図る。 ②児童理解に基づく学級経営を行う。 いじめへの対応を早期に行う。 ③不登校児童への支援体制の確立。 ④校外学習などを通して、さまざまな体験や集団活動を実施する。	・道徳や人権の授業において、命や思いやりの心、規範意識等を大切にする子どもを育成するために、考え議論する道徳科の授業を実施する。 ・異年齢の活動の場を設定する。 ・年に2回、アンケート調査を実施し、児童の声を聞く期間を設け、実態調査を行う。事例に応じて、職員全体で共通理解し、対応する。 ・不登校担当教員、不登校支援員を配置し、授業を進めながら不登校児童に対応できるようにする。また、不登校傾向の児童にとっての居場所として、おひさま学級を運営し、児童が安心して登校できるようにする。 ・児童の発達段階に応じたさまざまな経験をさせること、集団活動を通して、望ましい体験活動ができるように、計画・実施する。	・児童アンケート「自分にはよいところがあると思いますか。」、「いろいろな友だちの良いところを認めて大切にしていますか。」、「きまりを守って、ろうかを歩いていますか。」において、肯定的に回答した割合が80%以上になる。 ・アンケート実施後、各学年で児童の実態を共有し、今後の対応を検討する機会を設けている。 ・児童の実態を話し合う場を月1回以上設けている。 ・不登校担当教員を中心に、児童にとって過ごしやすい環境が整っている。 ・各学年において、日々の授業や校外学習などで、文化や自然に親しみ、公衆道徳を学んだり、望ましい体験をさせたりする機会を設けている。	B	・月に一回、職員全体での共通理解ができているため、対応が素早くできた。 ・不登校傾向がある児童が過ごす場所については、不登校担当教員がいることで、安定した「おひさまルーム」の運営ができ、数値として、不登校が増えていない現状となっている。そのため、来年度もこのような役割の教員が不可欠である。 ・体験的活動を意図的に組み込むことができた。体験をとおして、よい経験をさせることができている。 ・「おひさまルーム」については、場所が現在の場所に変ったことで、行きやすくなったという声が多い。しかし、来る児童が増え、賑やかになることで、児童によっては、人の気配を感じ、入室しにくくなった子もいた。 ・児童アンケート「きまりを守って、ろうかを歩いていますか。」については、低学年で85.4%、高学年で90%と目標を達成しているものの、実態が伴うように指導を続ける必要がある。 ・児童アンケート「自分にはよいところがあると思いますか。」については、低学年で91.1%という結果が出たものの、高学年では、77.5%と目標を下回る結果となった。自己肯定感を伸ばすような取り組みを行う必要がある。	・道徳の授業の充実を図る。そのため、授業の中に、考え、議論する話し合いの機会を設ける。そして、現実起こっている事実と学習を結びつけるような流れをつくる。 ・生活指導においては、きまりの徹底を行うために、教職員間で指導方法を共有し、統一感をもってすすめていく。 ・肯定的に児童をみとることで、ほめる場面を増やし、児童の自己肯定感を高めていく。 ・体験活動については、今年度同様、意図的にカリキュラムへ組み込んでいく。	・不登校対応は十分に行われている。今後も学校と保護者、関係機関で連携し、それぞれの児童に合った支援を行っていったきたい。 ・今後も、道徳科におけるローテーション授業や交換授業など続けていきたい。 ・自己肯定感をはかるアンケートの質問が適切であるかは疑問。児童が自分に一つでもよいところがあると思えばそれが自己肯定感なのではないか。児童の学校生活の様子を見る限りでは、楽しんで通学している児童が多い。それが、自尊感情の高まりと捉えられるのではないか。 ・体験活動や出前授業、地域や異学年との学習活動は、今後も続けていきたい。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	○挨拶・姿勢等の習慣をもつ 粘り強く活動に取り組む ①健康な体づくり・体力の向上 ②クラブ活動の時間の実施 ③望ましい食習慣の推進	・健康的な生活習慣を身につけさせるために、長期休業明けに生活リズムチェック表を活用する。 ・「ほけんだより」を用いた保健指導や保健委員会による保健広報活動を行う。 ・体育の授業を活用し、サーキットトレーニングを行う。また、毎週火曜日の休み時間に体育倉庫を開放し、運動習慣の育成を行う。 ・長なわ大会や荻野なわとび検定など、体育委員会主導で学校全体の活動を行う。 ・5、6年生を対象に、年間4回のクラブ活動の時間を実施する。 ・個々の児童が安心安全に、給食を食べられるよう、アレルギーについて、学級指導をする。 ・栄養教諭による「食の指導」を実施する。また、給食センターから送付される食に関する掲示物を掲示する。 ・給食委員会による広報活動を行う。	・「保健だより」を用いて、保健指導を月1回実施する。 ・生活リズムチェック表を2学期、3学期に実施する。 ・児童アンケート、「早寝・早起き・朝ご飯」など、規則正しい生活ができていますか。」において、できていると回答した割合が80%以上になる。 ・児童アンケート、「運動することやスポーツを観ることが好きですか。」において、好きと回答した割合が90%以上になる。 ・クラブ活動を実施している。 ・季節の食材を知ったり、栄養について考えたりする機会を設けられている。 ・食に関するクイズや豆知識を学校放送で伝えている。		・「保健だより」を用いての保健指導は、月1回実施することができた。 ・生活リズムチェック表を2学期、3学期に実施した。提出率は、81.1%で多くの保護者の方に協力してもらうことができた。 ・児童アンケート、「早寝・早起き・朝ご飯」など、規則正しい生活ができていますか。」については、低学年で84.1%、高学年で78.3%という結果となり、高学年で目標を少し下回る結果となった。 ・児童アンケート、「運動することやスポーツを観ることが好きですか。」については、低学年で86.2%、高学年で77.6%という結果となり、目標を下回った。 ・クラブ活動は、年間4回実施することができた。 ・学校放送をとおして、季節の食材を知ったり、栄養について考えたりする機会を設けることができている。また、食に関するクイズや豆知識を伝えることもできた。	・「早寝・早起き・朝ご飯」など、規則正しい生活ができているかについては、講演会等、外部とも連携して、健康の大切さについて呼びかける機会を増やしていく。 ・運動することについては、外に出づらい冬季のアンケートだということがあるものの、体育の授業や業間外遊びの活性化を行い、運動に親しむ環境を整えていく。	・生活リズムについては、家庭教育である。今後も家庭への啓発を続けていきたい。 ・体育の授業の工夫や休み時間のイベントなど、児童が楽しんで体を動かす工夫を続けていきたい。 ・いろいろなスポーツの面白さを伝えることも必要ではないだろうか。

	教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	○課題を見つけ挑戦する 多様な視点から考える ①自ら課題を見つけ、考え行動できる児童を育てる。 ②児童や保護者の困り感に応じて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを活用する。 ③支援の必要な児童のニーズ把握、個に応じた学びの場や合理的配慮の提供を行う。	・キャリアパスポートを活用し、振り返りや自己評価をすることで、新たな学習意欲を高めたり、将来の生き方を考えたりさせる。 ・学級での様子、児童の相談に基づき、児童の困り感を把握する。また、家庭訪問や懇談を通して、保護者の困り感を把握する。 ・児童理解のための情報共有を行い、支援について検討し、校内の体制を整える。 ・個別の支援が必要な児童については、困り感に応じて通級指導を行う。 ・特別支援教育支援員を活用し、一斉授業の中で個別のサポートを行う。 ・必要に応じて、個別の指導計画を作成し、児童の実態を引き継ぐ。	・年に2回、キャリアパスポートを記入する際に、各学年に応じて、自分の成長を確認したり、将来に向けて考えを記入したりする姿が見られる。 ・児童アンケート、「自分は、将来の夢や職業について考えている。」において、考えていると回答した割合が80%以上になる。 ・担任が聞き取った困り感について、学年や特別支援コーディネーター、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと共有することができている。 ・教職員アンケート、「支援の必要な児童について理解を深め、合理的配慮や基礎的環境整備を意識しながらともに認め合い、支え合う授業・学級・学校づくりを進めた。」において、あてはまる、ややあてはまると回答した割合が80%以上になる。	B	・各学年でキャリアパスポートの活用ができた。 ・児童アンケート、「自分は、将来の夢や職業について考えている。」については、低学年で87%となり、目標を達成できたものの高学年では75.5%と目標を少し下回る結果となった。 ・担任が聞き取った児童の困り間については、学年や特別支援コーディネーター、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの間で共有し、対応することができた。 ・教職員アンケート、「支援の必要な児童について理解を深め、合理的配慮や基礎的環境整備を意識しながらともに認め合い、支え合う授業・学級・学校づくりを進めた。」においては、77.7%と目標を少し下回る結果となった。	・高学年になると、現実が見えるようになり、実際の職業を考えるようになるため、夢が持ちづらくなっていると考えられる。そのため、実際の職業について調べさせる機会をとったり、保護者や地域の人など身近な人から実際に話を聞く機会をもったりすることで、自分の将来について考えさせるようにする。 ・児童理解のための情報共有を行い、支援について検討したことをもとに、合理的配慮をどう行うか、ともに認め合い、支え合う授業・学級・学校づくりをどう進めるのかについても研修を行っていく。	・世の中が、ホワイトカラーの職業がいいという風潮になっている。農業や製造業などの良さを児童が知っていないし、目にする機会が少ない。町探検や校区探検などの機会に農業や製造業の現場を見学し、かっこよさや面白さを知ってほしい。 ・児童も職員も認め合い支え合える学校づくりを今後も進めていっていただきたい。
	特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実	○他者に共感し寄り添う ①支援の必要な児童に対して、指導内容・支援方法の相談を行う。 ②共に生き、共に学ぶ、インクルーシブ教育の推進を行う。	・支援の必要な児童の困り感に対する手立てについて、伊丹特別支援学校のコンサルテーションを通して学ぶ。 ・交流学級を生活の基盤とする。 ・交流学級の担任と特別支援学級の担任が連絡を密にし、意思疎通を図る。 ・教職員に対して、特別支援学級の参観(授業公開)を行う。 ・特別支援学級の子どもたちの共通理解を図るために、研修会を行う。	・支援の必要な児童を含めて、すべての児童が学び合えるユニバーサルデザインの授業づくりを考えることができる。 ・児童アンケート、「学習や遊びで困っている人がいるとき、みんなで声をかけたり、助け合ったりしていますか。」において、していると回答した割合が 80%以上になる。 ・教職員アンケート、「特別支援教育校内委員会・校内教育支援委員会は、効果的に機能している。」において、していると回答した割合が90%以上になる。 ・教職員アンケート、「児童が安心して生活できるように学級担任とひろがり担任・通級担当等が連携している。」において、よくあてはまる、ややあてはまると回答した割合が90%以上になる。		・支援の必要な児童の困り感に対する手立てについては、伊丹特別支援学校のコンサルテーション等を通して学んだことを実際に行うことができた。 ・児童アンケート、「学習や遊びで困っている人がいるとき、みんなで声をかけたり、助け合ったりしていますか。」においては、低学年で87.4%、高学年で85%と目標を達成することができた。 ・教職員アンケート、「特別支援教育校内委員会・校内教育支援委員会は、効果的に機能している。」においては、85.2%と目標を少し下回る結果となった。 ・教職員アンケート、「児童が安心して生活できるように学級担任とひろがり担任・通級担当等が連携している。」においては、96.3%と目標を達成することができた。	・特別支援教育校内委員会・校内教育支援委員会については、対象となる児童が多いため、会議時間が長くなったり、共有が十分でないところに課題があった。話し合う際には、月ごとに対象児童をしぼり焦点化していくようにする。また、共有が図りやすくなるよう、資料を工夫していく。	・特別支援学級や通級指導教室での支援が適切に行われている。次年度は特別支援学級在籍児童数が増えるが、今後も児童一人ひとりに応じた支援が行えるよう、学校全体で取り組んでいっていただきたい。
	教職員の資質向上 ①研修等の充実	○教職員の資質向上をめざした多様な研修を行う。	・授業力の向上や授業改善をめざした授業公開の実施や、それに伴う自主研修会の実施 ・子どもの安全や命を守るための組織体制づくりの研修会の実施	・それぞれのテーマに応じた研修を年間複数回実施する。	A	・若手教員のニーズに応じて研修内容を計画し、学期に1回程度の研修会を実施することができた。 ・個々の授業改善や子どもの安全を守る体制の構築等、多様な種類の研修を実施することができた。	・各研修において、個々の反省を活かしながら、個々の資質向上を目指した研修となるよう、引き続き、計画、実施していく。	・授業研究や研究発表会など、研修を熱心にされている。超過勤務等、負担にならないように工夫しながら研修を進めていっていただきたい。

教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	①学校運営協議会の活動の充実を図る。 ②学校情報の積極的な発信を行う。	・学校運営協議会と教職員とのつながりを深める。 ・学校だより、学年だよりを発行する。 ・学校ホームページを更新することによって、学校情報を積極的に発信する。	・教職員の研修に、学校運営協議会委員が参加する、合同の研修会を実施する。 ・保護者アンケート、「学校は、学校の情報を学校だよりや学年だより、ホームページ等を通じて、保護者に伝えている。」において、伝えていると回答した割合が90%以上になる。	A	・夏期研修の中で教職員の研修に、学校運営協議会委員の皆さんに参加していただき、合同の研修会を実施することができた。 ・保護者アンケート、「学校は、学校の情報を学校だよりや学年だより、ホームページ等を通じて、保護者に伝えている。」において、98%という結果となり、目標を達成することができた。	・今後も学校運営協議会との合同研修を行っていく。行事や学習への協力も引き続きお願いしていく。 ・これからも、情報公開の機会を増やしていく。	・教職員との合同研修や、話しをする機会をもっと増やしていきたい。また、学校が必要としている支援等を伝えていただきたい。
	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	①防災、安全教育の充実を図る。 ②登校指導を実施する。 ③交通ルールの説明、自転車安全教室を実施する。 ④安心・安全な学校づくりを行う。 ⑤教職員のやりがいを感じた業務改善の実施	・火災、防犯、地震の避難訓練を学期に1回実施し、事前・事後指導で身の守り方を確認する。 ・月に1回、校区の危険箇所立ち、児童の登校している様子を確認する。 ・警察の方に、自転車の乗り方や一年生への登下校指導をしてもらう。 ・長期休みの前などに、交通ルールについて、学校全体や学級でも指導する。 ・安全点検を月に1回実施し、学校施設や設備の安全・美化に努める。 ・労働安全衛生委員会を設置し、現場の声を聞き、業務改善を進めていく。	・児童アンケート、「避難訓練の時に、『お・か・し・も』のきまりを守って、自分で避難できますか。』において、できると回答した割合が90%以上になる。 ・登校の仕方では、気になることには、すぐに対応し、全児童に指導することができる。 ・児童アンケート、「自転車に乗るときに、安全に気をつけることができますか。』において、できていると回答した割合が90%以上になる。 ・安全点検をもとに、児童が安全に過ごす環境を整えることができる。 ・職員の発案による業務改善を組織として行うことができる。	B	・避難訓練を学期に1回行うことができた。 ・訓練の際には、マニュアルに沿って、対応の仕方を考え、実際に行動することができた。 ・児童アンケート、「避難訓練の時に、『お・か・し・も』のきまりを守って、自分で避難できますか。』においては、低学年で95.1%、高学年で98.3%と目標を達成することができた。 ・児童アンケート、「自転車に乗るときに、安全に気をつけることができますか。』においては、低学年で93.5%、高学年で93.4%と目標を達成できた。しかし、普段の自転車の乗り方を見ていると、安全意識に課題がある。 ・保護者の緊急時の対応については、「災害に備えて」の手紙を配布し、家庭で話し合っていたら、きつかけをつくることができた。	・自転車の乗り方や登下校時の道路の歩き方については、荻野小学校区の地区安全マップや危険箇所の写真などを活用し、指導を行っていく。	・日頃からの交通安全指導をはじめとする安全教育が大切である。登下校の歩き方や自転車の乗り方など、今後も指導をお願いしたい。 ・学校は、課題や多様なニーズに答えようと尽力している。教職員の負担が増加しないよう、また、教員の魅力を伝えられるよう、地域も一緒に取り組んでいきたい。

学校関係者評価総括 荻野小学校の教育活動は概ね良好であり、学校教育目標の実現に向けた取組の成果があらわれている。今後も、異学年や地域、専門家等とつながる学習や児童自身がやりたいと思える行事などを工夫して、荻野っ子らしく、元気に遊び、のびのびと育つ安心安全な明日もいきたい学校づくりを進めていってほしい。学校は、様々な課題に対応したり、熱心に研究を進めたりしており、教職員への負担が大きいと考えられることから、教職員にとっても、安心安全で、働きやすい職場環境づくりを進めていく必要がある。

次年度に向けた重点的な改善点 ①基本的な生活習慣・学習習慣・読書週間の確立に向け、生活リズムチェック表や家庭学習の手引きを活用し家庭への啓発を進め、家庭や地域と連携していく。 ②ともに学び合い認め合える学級づくり、児童が主体的に取り組み、自己肯定感を高められる学習活動や学校行事づくり、また、体力・学力の向上を図るために、職員研修や地域との連携を充実させていく。 ③学校運営協議会等の協力を得ながら、教職員の働き方改革に取り組んでいく。
--

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った